

# 学校点描

続

最上中はとても暖かい校舎で、ここに通う生徒も職員も幸せです。廊下には半袖姿の生徒もみられます。

《最上町立最上中学校》

NO.16

R6. 12. 18

担当：校長

11月28日（木）に、今年も夢議会と題して、中学生が町の議場にて一般質問を各課の課長さんに行う子ども議会が行われました。菅嶋 絢さんが開会宣言を行い、議長席に座った結城道瑛さんと伊藤陽菜さんが、議会事務局長さんの指導を受けながら議事を進めています。町づくりのテーマごとに15名の3年生の生徒が議員となって質問や提案を行いました。町長さんや課長さん達が本物と同様に答弁書をもとに丁寧に答えてくれました。

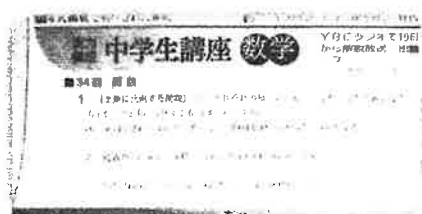


## 人生の転機

職員会議では、来年度の最上中学校の教育課程について検討を進めています。来年度の柱は「キャリア教育」です。かつてのキャリア教育は、夢を見つけ、それに向かって努力することに重点を置いていました。しかし、これからのキャリア教育は、「その時々自分らしさや役割」を見つけ、自分を磨くための挑戦をしていくという考え方にシフトしています。中学生には中学時代のキャリアがあり、その時期に果たすべき役割が存在します。

彼女はものづくりが好きで、DIYで自分の部屋を季節ごとに飾り替えるのが日課でした。中学時代の夢は保育士でしたが、母親が入院したことで生活は一変。学校帰りに県立病院に立ち寄り、母の顔を見てから帰るのが日常になりました。

彼女は中学時代、夏も冬も徒歩通学でした。仕事から帰ると、彼女は自分の部屋で疲れて寝ています。ある日、父親が受験勉強に向けて「朝5時に起きて一緒に勉強しよう」と提案すると、しぶしぶながらも彼女は応じました。



冬の早朝、冷えた部屋のストーブをつけて娘を起こし、新聞の「中学生講座」を解くのが父娘の日課になりました。彼女は努力の末、志望高校に合格。母親も入学式に参加し、喜びを分かち合いました。

高校生活を楽しむ中で、彼女の夢は保育士から看護師へと変わりました。なぜ

進路が変わったのかは、父親にはなんとなくわかりました。母親の病状が良くなり、お見舞いに行く度に弱っていく姿、そして懸命に看病してくれる医療関係者の姿。いつだったか母親が大きな病院に転院する時、車窓から見えたおしゃれな建物の看護大学を見て、「〇〇ちゃんも、こんな大学に入れたらいいね」と母親から言われたことを知っていました。高校3年生になった彼女は、看護大学を目指して一人で勉強を続けました。母親が亡くなった後は、父娘二人きりの生活。父ができることは、朝のお弁当を作るくらいでした。大学の合格発表の日、不合格という結果に彼女は「仕方ないよね」と笑い、看護専門学校への進学を決めました。



この体験を振り返ると、彼女のキャリアは固定された夢や計画ではなく、人生の中で出会う転機や人々との関わりを通じて形づくられたものだと気づかされます。これからのキャリア教育も、同じように「変化を受け入れながら自分の道を見つける力」を育てていくことが大切です。生徒一人ひとりがその時期ごとの役割を通じて自分を成長させられるよう、来年度の教育課程を考えています。

大学ではなく、同じ市内にある看護専門学校に通うことにしました。アパートを借りて、引っ越し準備をしていた時、父親の携帯が鳴りました。3月30日でした。

「〇〇さんを、補欠合格とします。」と。電話の向こうの大学関係者の人が言いました。父親はびっくりして外出していた娘に連絡します。

電話に出た娘は「お母さんからのお祝いだね」とうれしそうに言って、車窓から母娘の二人で見た大学に入学しました。

それがわたしの家族です。

きりとりせん

ご意見・ご感想をお願いします。